

高校時代の挑戦が、人生の原点に

三洋貿易株式会社 代表取締役社長

しんたに まさのぶ
新谷 正伸 氏(高校29期)

1977年3月	立川高校卒業(高校29期)
1982年3月	早稲田大学理工学部卒業
1982年4月	三洋貿易株式会社 入社
2018年12月	三洋貿易株式会社 代表取締役社長就任



■生い立ち

“おもろい人生”。これまでの歩みをひとことで言い表すなら、まさにこの一言に尽きる。生まれは昭和三十三年、まだ戦後の名残が街角に漂い、どこか牧歌的な空気が残る東京・荻窪。父は山口県出身の筋金入りの長州人。一方の母は都会的な感性を持つお嬢さん育ち。長州の血の熱さと都会の品格—この相反する二つが混ざり合って、私という人間ができあがったのだと思う。三歳のとき東村山に引っ越し、当時はまだ一面の田んぼと野原が広がる“大田舎”で、未舗装の道を自転車で走り回り、ザリガニやカエルを追いかけて、泥だらけで帰宅する日々。自然は私の初めての遊び場であり、好奇心を刺激し続けた。

■高校時代

進学した立川高校は地元随一の進学校。そこでは、中学時代の“一番・二番”が多摩全地域から集まっており、学力での頂点は早々に諦めざるを得なかった。それでも「何かで一番になりたい」という思いは消えず、今度はクラスで一番騒がしい存在として名を馳せた。先生方からも、クラスがうるさいときはまず「新谷だな」と疑われるほどだった。そんな私を、なぜか美術の原田先生は気に入ってくれた。授業中に叱られても、放課後は職員室に招き入れ、世間話や昔の教え子の話をしてくれた。過激な学生運動時代の心優しき立高生、テレビが映りにくい山奥の町でテレビ塔を自ら建てた卒業生、そして、元外務大臣・高村氏のエピソード—その一つ一つが私の視野を広げた。後年、ニューヨーク駐在中に原田先生を招き、メトロポリタン美術館やボストンの名館を案内できたことは、今でも胸が温くなる思い出だ。

高校生活の中心は、野球部だった。強豪とは言い難いチームだったが、センターを守り、6番打者として日々汗を流した。夏の大会ではシード校として臨み、武蔵高校に勝利してベスト16入り。優勝した桜美林高校は、そのまま甲子園でも頂点に立った—まさに激戦の世代だった。振り返れば、あの頃は野球だけではなく“冒険心”にも火がついていた。ある夜、友人との賭けに負け、「それなら走ってみせる」と深夜に東村山の自宅を出発。青梅を抜け、八王子を越え、町田まで—約90kmを走破した。夜の静けさの中、ただ前を見て走り続けたあの感覚は、今も忘れられない。また、同級生の家をバイクで訪ね歩き、寄付を募ってクラスに壁掛け時計を贈ったこともあった。親御さんを驚かせたその行動が、後に思わぬ縁を運んでくれた。

■卒業後現在まで

高校卒業後、早稲田大学理工学部・工業経営学科で経営理論と製造の実際を学び、卒業後は三洋貿易に入社。入社当初は国内営業で経験を積み、その後は徐々に海外案件にも関わるようになった。やがて国内外での幅広いビジネスに携わり、31歳で初めてニューヨーク駐在を任される。米国全土に原材料を販売しながら、商談相手の文化的背景や価値観を理解しつつ、自分の意思を正確かつ誤解なく伝える難しさと、その中にある交渉の奥深い面白さを全身で体感した。

45歳ではタイ・バンコクに赴任。急成長する東南アジア市場で、現地スタッフと膝を突き合わせて議論し、信頼を築くことの重要性を改めて学んだ。市場調査から販売網の構築、取引先の開拓まで、スピード感のある日々だった。そして53歳、再びニューヨークへ—今度は現地法人社長として、中南米市場開拓という新たな挑戦に臨む。ブラジルやアルゼンチン等の中南米を訪ね歩き、現地の商慣習に適応しつつ戦略を練った末、メキシコ進出を決断。この一手は後の事業成長を大きく後押しすることとなった。



インドネシア現地法人にて



「賢者の選択」出演時

2018年末、代表取締役社長に就任。ドイツ・ミュンヘンや米国アラバマ、タイ・レムチャバンなどに新拠点を開設し、国内外で複数のM&Aを成し遂げ、事業の裾野を大きく広げた。座右の銘は「人事を尽くして天命を待つ」。高校時代の90kmラン、野球に打ち込んだ日々、そして新しいことへの果敢な挑戦—その一つひとつが、今の私を形づくる確かな礎となっている。立高魂の血が、今になっても体の中を脈々と流れているかのようである。



メキシコ現地法人訪問時

■立高生へのメッセージ

理論だけでは到底十分理解し納得しきれない世界が益々深まっていく中において、今後の人生において己の心の奥底の信じることに従って行動されることが大切である。私は「人事を尽くして天命を待つ」だが、「生きるという事は行動する事に有りき」と思う。